

## トロント補習授業校児童生徒の日英作文力の実態 ーバイリテラル育成の観点から

トロント大学名誉教授  
中島 和子

### はじめに

グローバル時代に備えて、カナダで育つ子どもたちに日本語力とともに高度の英語力も身につけてほしいと願わない親はいないでしょう。では、どうしたら一つ以上の作文力が育つのでしょうか。確かに国語の作文力の育て方は日本には長い伝統があり、またトロント補習授業校には長年の経験から生まれた知見があります。でも日本語と英語という組み合わせの二つの言語の作文力をどう育てるかとなると、ほとんど参考になるものがないのが実情です。そこで3年前、矢木校長にお願いにあがり、校長と補習授業校の教員のご理解とご協力を得て、小学生、中学生全員に同じテーマで日本語と英語の作文を書いてもらい、日本語作文力と英語作文力との関係について調べさせていただきました。また保護者の皆様には、お子さんの生育・学習歴や家庭での読み書きに関わる取り組みについてアンケート調査にご協力いただきました。その後貴重なデータを無駄にすることなく、役に立つ成果を得たいと研究グループを立ち上げて分析・研究に取り組んできました。心ならずもご報告が遅れておりますが、組み尽くせない内容の濃いすばらしいデータであるためまだ分析進行中という状況です。この場を借りて、補習授業校の貴重な授業時間を使わせていただいたこと、矢木校長をはじめ、教員、保護者の方々、そして真面目に取り組んでくださった生徒さんたちに研究グループを代表して感謝の意を表したいと思いません。

これまで得られた成果を3つに分けてご報告いたします。第一回は「バイリンガル作文力とは?」、第二回は「バイリンガル作文力と家庭のあり方」、そして近い将来分析が終わった段階で、第三回「高度な書き言葉を海外でどのように育てるか」についてご報告したいと思います。

本題に入る前に、どんな作文を書いたのか、その概要をお知らせしておきましょう。テーマは「カナダのことを知らない人にカナダのことを説明してください」で、40分ですまず日本語で、翌週同じテーマで英語で書いたものです。全

員参加の予定でしたが、当日はお休みなどさまざまな理由で、最終的に分析の対象としたのは 269 名のバイリンガル作文でした。1年 34 名、2年 45 名、3年 33 名、4年 39 名、5年 24 名、6年 35 名、中学1年 17 名、2年 27 名、3年 15 名です。このうちカナダ生まれのお子さんが 32%、カナダに来て二年以内が 27%、両親とも日本人家庭 69%、片親日本人家庭が 30%という状況でした。

## 1 「バイリンガル作文力とは？」

二つの言語で作文を書くというバイリンガル作文は、日本語だけ、英語だけで書くモノリンガル作文とどのように違うのでしょうか。そして、学習時間の制約がある中でバイリンガル作文力がどうしたら育てられるのでしょうか。問題の鍵を握るのは、両言語の作文力がどのような部分が共有され、どのような部分がそれぞれ個別なものかという点です。この2言語の共有面と個別面の研究でトロント補習授業校にご協力をいただいたのは、実は今回が初めてではありません。1998 年から5年間 2/3 年生、5/6 年生の協力を得て、日本語と英語の「話す力」と「読む力」について調べたことがあります。「話す力」では「対人関係スタイル」が2言語の共有面、「読む力」では、日本語読書力が英語の読みの力の支えとなっていることが分かりました。では、「書く力」はどうかというのが今回の課題です。実は、「書く力」について調べてみて驚いたことがいくつかありました。今回はその中から4点取り上げてご報告したいと思います。

まず**第一**は、「書く力」は「話す力」や「読む力」と違って、一度身に付いたらなかなか落ちないということです。日本語を「話す力」は、低学年の場合、特に不安定で、日本語を親が家で使っていても、2年もカナダにいと英語の方が得意になり、日本語を話すのが億劫になる傾向が見られました。「読む力」は補習授業校の学習を通して保持ができていように見えるのですが、実際は4年ぐらい経つと学年相応の力を保つのが難しくなっていました。要するに「話す力」や「読む力」は、出国年齢や滞在年数の影響をもろに受けるということです。そして作文力も同じだろうと思っていたのですが、ところが予想に反して、「書く力」は出国年齢や滞在年数の影響が非常に少なく、年齢の影響が強い領域だということが分かりました。つまり日本語を書く力はカナダ滞在が長引いても顕著に落ちるといふことはなく、海外でも伸ばすことが可能な力だということです。この点、帰国子女の調査でも同じ結果が出ており、英作文の力は

日本でも継続して伸ばせる力の一つだということが指摘されています。もちろん補習授業校の英語の作文力の方は、英語力がゼロで来加というケースがあり、その場合はどうしても滞在年数の影響を受けますが、5年ぐらいでその影響が消え、その後は年齢とともに深まっていくようです。

第二は、英語の作文力と日本語の作文力との関係です。読解力の場合は、日本語の読解力が高い子どもは、英語の読解力の習得が速く、高度な読解力が獲得できるというように、一つの言語の読みからもう一つの言語の読みへという、直線的な関係が見られました。ところが作文力の場合は、直線的な関係ではなく、多面的な関係だということが分かりました。どうしてそう言えるかということですが、一つは、英語作文力と日本語作文力がどのような面で互いに関係し合い、どのぐらいその関係が強いかということ調べた結果です。まず日本語作文と英語作文を14の共通項目で採点しました。そのうち7つは「主題」、「全体の構成」、「文と文のつながり」、「創造力・内省力」、「読み手意識」など作文の質に関する部分で、それを4段階で評価しました。つぎの7つは、「産出量（作文の長さ）」、「異なり語彙」、「従属節の使用」、「並列節の使用」、「表記、文法、語彙の誤用」など数で表せるものです。この14項目を使って両言語の関係を調べてみると、質的な面すべて、量的な面の7項目のうち3項目まで、中位の相関関係があり、その中でも強い関係が見られたのは「産出量」、「全体の構成」、「異なり語彙」でした。つまり日本語で、いろいろな語彙を使って、構成のしっかりした、長い文章を書く子どもは、英語でも同じような作文を書く傾向があるということです。もう一つの方法は、家庭での読み・書きの取り組みと日英作文力との関係を調べたものです。この分析で分かったことは、日本語で書く頻度が高いことが日本語の作文力と関係があったということです。そりゃ当たり前、と思われる方が多いと思いますが、驚いたことにそれが日本語作文力だけでなく、英語の作文力とも関係があったのです。同じように英語で作文を書く頻度が高いことと日本語の作文力との間にも相関関係が見られました。ということは、日本語で書くのも、英語で書くのも、いわゆる「書く力」全体を強めるのに役に立つということです。2言語の作文力の共有面とは、まさにこの「書く力」で、その中核にあるのが、時間内にどのぐらいの長さの作文が書けるか（産出量）、全体の構成がしっかりした作文が書けるか（全体の構成）、豊かな語彙を使って書けるか（異なり語彙）と言えるでしょう。

**第三**は漢字力です。ひらがな・カタカナと同じように使用漢字数、異なり漢字数（同じ漢字は除いた使用漢字数）を数えたのですが、漢字を表記の一部と考えたことが間違いであることが分かりました。たしかに漢字は表記の一部で日本語作文でしか使われないものですが、漢字力が日本語作文ばかりでなく、英語作文にも関係があるということが分かったのです。どのように調べたかと言うと、まず因子分析という方法を使って漢字と作文力との関係を調べ、つぎに異なり漢字数と家庭の読み書きに関する取り組みとの関係について調べたのです。

まず第一の因子分析ですが、日本語作文の場合は、使用漢字数が文章力と同じ因子で、異なり漢字数は、産出量や異なり語彙と同じ因子だということが分かりました。つまり、漢字力が日本語作文力全体に関わっているということです。つぎに英語作文の場合ですが、まさか漢字とは無関係だろうと思っていたところ、表記の誤用と使用漢字数と異なり漢字数という1つの因子が浮上しました。ということは、アルファベットであれ、漢字であれ、正しく書くという姿勢が共有されており、補習授業校で正確に文字を書く指導をすることは、日本語作文力を高めるだけでなく、英語の作文の正確度を高めることにも貢献するということを意味しています。

漢字に囲まれた日本の生活に比べて、カナダで育つ子どもはもっとも不利な状況で漢字力を育てなければなりません。このため補習授業校でもまたご家庭でも漢字学習には大変な努力をなさっていることと思います。この観点から家庭での読み書きの取り組みと異なり漢字数との関係を見てみると、一番しつかりとした相関関係が出たのが、日本語で日記などを毎日のように書く、つまり書く頻度が高い、ということでした。つぎに関係が見られたのが就学前教育で、カナダで意識して学校に上がる前から日本語環境に子どもを浸けるという努力をすることが、漢字力につながるということの意味しています。そして一番驚いたことには、英作文を毎日のように書くという取り組みが漢字力と関係があったことです。漢字力が、作文力の共有部分である「書く力」と深く関わっているということが分かります。

最後になりますが、**第四**は作文力とバイリンガルのタイプとの関係です。補習校生徒の背景の多様化が問題視されてきましたが、在籍児童生徒全員を一括するのではなく、いくつかの種類化して見ていく必要があります。いろいろな種類化ができますが、今回は、二言語の作文力の力関係で分けてみました。「日

**＝英高型**」（日本語も英語も強い）、「**日＞英型**」（日本語の方が英語より強い）、「**日＜英型**」（英語の方が強い）、「**日＝英低型**」（日本語も英語も弱い）です。このようなバイリンガルグループによって2言語の関係が違いますので、当然ご家庭での指導方針や補習授業校の教育内容も変わってくるのではないのでしょうか。

まず「**日＝英低型**」ですが、両言語の関係が一番弱く、「創造力・内省力」を除いて作文力の質的な面では全く関係がありませんでした。相関関係が見られたのは、「従属節」「文と文のつながり」「異なり語彙」など言語能力に関する部分でした。つまり両言語の言語能力に課題があり、二つの作文力がばらばらで互助的関係にはなっていないということです。これと全く逆なのが「**日＝英高型**」で、文章力はもちろん、「産出量」、「異なり語彙」に高い相関、作文の質全体に高い相関が見られました。両言語で、語彙が豊かで誤用が少なく、質の高い長文の作文が書けるということを意味します。また漢字力や「従属節の使用」とも有意の関係が見られ、このことは、複雑な文構成を使った書き言葉への移行が両言語で進んでいることを示唆しているように思われます。

「**日＞英型**」と「**日＜英型**」にはそれぞれ特徴があります。カナダ滞在年数が短く英語が発達途上にあるグループが「**日＞英型**」で、カナダ滞在年数が長いグループが「**日＜英型**」です。日本語力が英語力を上回る「**日＞英型**」は、英語作文では語彙やスペリング、文法に間違いが多いのですが、よく読み込んでみると作文の主旨や構成がはっきり見えてくる作文が多く、時間を経るとともに英語の語彙や文法を身につけて「**日＝英高型**」に近づいていくように思われます。一方「**日＜英型**」は、4つのグループの中で両言語間の相関が一番高く、中でも産出量が最高で8割近く、語彙がその次で7割以上の強い相関が見られました。作文を読み比べてみると、日本語ではいい足りない部分を英語でぐっと膨らませるというような方策も使われており、英語の作文力と日本語の作文力が持ちつ持たれつの関係にあるように思われました。

以上が、バイリンガル作文力における2言語の関係のほんのさわりの部分です。バイリンガルグループについても、2言語の力関係だけでなく、家庭での読み書きに関わる取り組みなどにも違いが見られるのですが、それについては、次回の2.「バイリンガル作文力と家庭のあり方」で詳しく述べることにします。

(C)kazuko nakajima 2013